

大阪大学図書館報

Vol. 22, No. 5 & 6 Feb. 1989 (平成元年) 通巻 95 号

目 次

- | | |
|------------------------|-----------|
| ○図書館に寄せて | ○教官著作寄贈図書 |
| ○米国医学図書館視察報告(2) | ○日 程 |
| ○研究室等の端末からの検索サービスについて | ○人 事 |
| ○国立大学図書館協議会シンポジウムに参加して | |

図書館に寄せて

山口 堯 二

1. 前口上

小春日和の日であった。図書館報編集委員の方が研究室に見えられ、「教養の学生が図書館をよく利用しますので……」というような話をされて、最近の「大阪大学図書館報」を教冊示された。1・2年次の学生に図書館の利用を勧めるようなことを、なにか書いてほしいということであった。学生に利用を勧めるというのはむつかしい注文だ、と内心想ったが、むげにお断りもできない。「まあ、書けることしか書けません」など、半ば自分に言い聞かすかのように、言わずもがなのことを呟いて、お引き受けしてしまった。「よく利用している」のなら、何も改めて書くこともないのに、などとそっとぼやいてみたが、もう後のまつりである。それから、気になるままに、私の中にある図書館についての記憶が、あれこれとりとめもなく脳裏に浮かんで消えるのだが、勿論名案など湧いてくる筈もない。いつか雲多き午後になっていた。

2. 私の場合

考えてみると、今は私自身、図書館という場所をあまりよく活用しているほうではない。以前、勤めていた大学では、研究室が図書館と同じ建物内にあつて、昼休みにもぶらりと書庫などへ出かけることができた。しかし、教養部イ号館4階の今の研究室から附属図書館までは、あてもなく足を運ぶには、すこし遠すぎる。最近では、やむをえない用がある場合だけ、

それも急ぐ必要がなければ、なるべくいくつかの用を溜めてから、出かけることが多くなった。

教養の1・2年次生にという注文をとつおいつするうち、私はおのずから私自身のその年頃のことを思い返し、そのころの日記が残っていることを思い出した。試みに探し出してみると、「講義は昼までで終わったが、直ぐ下宿へ帰って机に向う気にもなれない。例によって図書館へ行ってみた。」などと書いている。学生の頃は暇つぶしにも図書館はよく使っていたようである。「図書館にてオスカ・ワイルドの『獄中記』を読む」などなど、今ではなぜそんな本を読んだのかさえ思い出せない記録もある。「土曜なので昼から図書館で読書した。数学の時間に小堀教授からデカルトの『方法叙説』の話が出て、是非読んでおくように勧めていたので、早速読んでみた。」などという記事も、ちょっと晴がましい気持ちで読み返し、こんな具体的な読書の勧誘が、私にはどうも不得手であることに改めて気づきもした。古典的なものはともかく、専門の分野でも新しい書物には、どんぐりの背比べということが少なくない。その中で特にと推奨できるものを絞ることのむつかしい時代になっている、という事情もあるだろう。

3. 移りゆく風貌

附属図書館は、いわば大学の顔である。少なくとも従来そう見られて来たし、今も出来ればそうであってほしい。しかし、それがどの程度に目立つ魅力的な顔であるかは、時代とともに否応なく変わって来ているのではないだろうか。夏目漱石の『三四郎』を読むと、入学したての三四郎は、まず図書館を含む大学の雄大な建物を見渡して「学問の府はかうなくつてはならない」と感激している。

其翌日から三四郎は四十時間の講義を殆ど半分に減して仕舞つた。さうして図書館に這入つた。広く、長く、天井が高く、左右に窓の沢山ある建物であつた。書庫は入口しか見えない。此方の正面から覗くと奥には、書物がいくらかでも備へ付けてある様に思われる。立つて見てみると、書庫の中から、厚い本を二三冊抱て、出口へ来て左に折れて行くものがある。職員閲覧室へ行く人である。中には必要の本を書棚から取り卸して、胸一杯にひろげて、立ちながら調べてゐる人もある。三四郎は羨ましくなつた。

今の学生諸君の大学入学時にこんな感激があるだろうか。どうもそうは思えない。三四郎は、「読んで見なければ分らないが、何かあの奥に沢山ありさうに思」つた。そういう未知の奥深い世界へのあこがれ、漠とした畏敬の念のようなものは、ひとり三四郎に限らず、ある年輩までの人は誰しも心に抱いた経験があるだろう。しかし、言うまでもなく時代はその後ずいぶん変わった。今は何事によらず、日毎に産み出される目新しい情報が向うからぞくぞく押しかけて来る時代である。その価値は、こちらで選別しなければならぬ。うっかりすると、とんでもないものをつかまされもする。不確かな情報には、初々しい憧憬より、むしろ慎重な警戒心の必要な時代になった。これだけ世間の環境が変われば、大学図書館のイメージも変わらざるを得ない面がある。

芥川龍之介の『路上』と題する作品には、冒頭に大学図書館の閲覧室が出てくる。

午砲を打つと同時に、殆ど人影の見えなくなつた大学の図書館は、三十分経つか経たない内に、もうどこの机を見ても、荒方は閲覧人で埋まつてしまつた。

机に向つてゐるのは大抵大学生で、中には年輩の袴羽織や背広も、二三人は交つてゐたらしい。それが広い空間を規則正しく塞いだ向うには、壁に嵌めこんだ時計の下に、うす暗い書庫の入口が見えた。さうしてその入口の両側には、見上げるやうな大書棚が、何段となく古ぼけた背皮を並べて、まるで学問の守備でもしてゐる砦のやうな感を与へ

てゐた。

が、それだけの人間が控へてゐるのにも関わらず、図書館の中はひっそりしてゐた。と云ふよりも寧ろそれだけの人間がゐて、始めて感じられるやうな一種の沈黙が支配してゐた。書物の頁を繰す音、ペンを紙に走らせる音、それから稀に咳をする音――それらの音さへこの沈黙に圧迫されて、空気の波動がまだ天井まで伝はらない内に、その儘途中で消えてしまふやうな心もちがした。

このように多くの人を入れながら、しいんと静まり返る閲覧室のさまは、今も変わらない。そこには孜々とした知的営みのほかは受け付けられない一種の緊張感のようなものが感じられるものである。しかし、今は知の形が、音を立てて変わりつつある時代である。このような姿も、そのうち、図書館の一つのありやうに過ぎなくなっていくのかもしれない。図書館の旧「閲覧課」は最近「情報サービス課」に衣替えされたが、これも来たるべき大きな変化の予感に促された、取り敢えずの対応であろうか。近い将来、居ながらにして大抵の情報は得られる時代が来るのであろう。が、人文科学や社会科学の領域では、古い書籍・情報は古いがゆえに尽きない価値を持つてくることが多い。図書館の書庫深く蔵され、利用する人の限られた古書の類などは、今後も図書館で直接手に取って調べてくれる人の訪れをまつのみ眠りを覚ますことになるに違いない。

4. 偶然の出会い

最近知りたい情報の検索がいろいろの面で容易になった。しかし、そうして細切れの情報を手軽に得られるようになっただけ、時間をかけてじっくり物事の全体像を眺める機会や、対象の世界に深く沈潜する心のゆとりは、それだけ乏しくなったようにも思える。私は仕事から古い時代の言葉の用例探しに時間を取られがちであるが、時間の許す限り、拾い読みでもよい、具体的な文章を読みながら、手探りで例を求めることが多い。細部の見落としがあつても、そのほうが事のついでにも、自分なりに思いがけない発見をする幸運に恵まれることが多いと思うからである。急がば、回れ。大きい書架に並ぶ無数の書物に目を走らせて得られる書物との出会い、これはと思うものがあれば、早速手に取ってページを繰ってみる、あるいは、借り出す、そんな半ば偶然の出会いに眼を開かれる機会は、図書館でこそ得られる。本を借り出そうと手続きをすると、裏の見開きに貼られた紙片に日付などが記される。それを見ると、どれくらい読まれている本かも一目で判る。「驚いたのは、どんな本を借りても、屹度誰か一度は眼を通して居ると云ふ事実を発見した時であつた。」と『三四郎』にも出てくる。なにか知の世界のちょっとした同行者、あるいは、ライバルを見つけたやうな思いがするものである。

大江健三郎の『新しい人よ眼ざめよ』という作品には、教養の最初の学年に、大学図書館でたまたま隣の机の上に開かれていたページを覗き、その詩句の一節に「自分の運命がそこに語られているという、強力な合図」を受け取る、というくだりがある。後にそれがブレイクの予言詩の一節であることを探しあてるといふのだが、そんな不思議な偶然の出会いに現実感を与えているのも、ほかならぬ図書館という場であつた。我々の大学図書館は、どんな思いがけない出会いを与えてくれることであらう。

怠らぬあゆみおそろしかたつぶり 太祇

(やまぐち ぎょうじ 教養部 教授)

米国医学図書館視察報告（2）

福留 武士

今夏、大阪大学の米国医学図書館視察団の一員として、直かにアメリカの大学図書館に接する機会をえました。北部太平洋岸の Washington 大学(Seattle)を振り出しに、UCLA、Texas 大学(San Antonio)、Michigan 大学、そして Cincinnati 大学の医学図書館を視察し、強行日程ながら充実した成果をあげることができたと考えている。

さて、はじめて見るアメリカ大陸への接近は朝方で、バンクーバーの南辺りからシアトルへの海岸沿いに南下する上空からの眺めが非常に美しい景色でした。それにもまして雲一つない真っ青な空にマッチして、緑濃いキャンパスに包まれた Washington 大学のあまりの美しさに、はじめて訪ねたアメリカの大学への興奮があった。

私達の旅の目的は医学部および附属病院等関連施設の中之島地区から吹田地区への移転に伴う、附属図書館中之島分館の移転・新営を機に「生命科学図書館」として機能させるに足るものを求めて、また、いままで検討を重ねてきたことの再確認のものでもあった。

そこで視察の重点目的とした LRC (Learning Resources Center) について若干の感想を述べてみたい。わが国の大学図書館界においては、LRC なる施設そのものが皆無の状態であり、図書館学の文献を調べても同様である。アメリカの文献には短大と医学図書館の LRC についてはかなりの記述がでてくるが、もう一つ馴染がないというのが実情でしょう。アメリカでは今回訪ねた 5 大学は勿論のこと、ほとんどの医系図書館に呼称の違いはあってもいわゆる LRC がある。われわれは生命科学図書館の新営にあたって、はじめて LRC の導入について本格的に検討した。現在、日本の大学においても視聴覚ホール、視聴覚ブースの設置や文献検索サービスが漸次進められ、それなりの成果をあげている。視聴覚ホール、視聴覚ブースなど個々には大変豪華な施設がみられるようになった。しかし、それら施設が個々に使われているだけで、研究・教育・学習の場で有機的に機能しているとは言い難いのではないのでしょうか。活字以外のメディアによる学術情報の重要性が増すなかで、情報検索や資料の収集・提供についても、総合的に活かされるものとしての LRC なるものに注目したい。

訪問した 5 大学のなかでも、特に印象深かったのは Texas 大学 San Antonio 校の Dolph B. Briscoe Library と Cincinnati 大学の Medical Center Information and Communications (MCIC) であった。Texas 大学の医学部は San Antonio 校のほか Dallas、Galveston、Houston にもおかれている。San Antonio には有名なアラモの砦があり、スペイン情緒を漂わす全米 5 指に入る観光地だそうである。また到着した日、全米第 10 位人口のこの町の気温はなんと摂氏 41 度であった。市内からも、空港からも見渡すばかりのテキサスの大平原を車で走って、42 万 m² の広大な面積を占める Medical Center 内にあるこの図書館は見学者も多く、建築等の素晴らしさについては、鈴木分館長の前回報告でも紹介されているとおりである。この図書館の玄関は 3 階にあり、入って正面に Information Desk、そしてカレント誌、抄録誌、索引誌、レファレンス資料などが配架されていたが、Computer Search Service が

Information Desk のすぐそばに、また主要 2 次資料も他の 2 次資料と分けて前面に出されている。事務室もこの階におかれている。4 階は製本済雑誌、5 階には単行書が配架されている。2 階に Teaching Learning Center (T L C) が設けられている。この図書館でも少し前までは L R C といっていたが、現在は T L C と改称している。設備としては照明調節のできる学習室 (約 40 席) のほかカンファレンス室、14 のグループ学習室 (比較的大きいのが 1 室)、レントゲン読影室、教材製作室と機器構成については何通りかの組み合わせをもつ数 10 台の学習用ビデオカセットのブースやマイコン類が備えられていた。視聴覚資料はカウンター後の書架に収容されており、所蔵数はオーディオカセット、ビデオカセット、マイコンディスク、ビデオディスク、スライド、映画など 3,500 タイトルにおよんでいるが、機器類の使用は館内限りであった。丁度、私達が訪問したときも、何台かのブースではビデオを利用しての自習に余念のない学生が何人かいた。熱心にメモをとっているところを後から覗き込むと、歯学部的女子学生であろうかニコッと笑顔で振り向いたが、大きく口を開けた歯科治療の画面にまた戻った。別のブースでは腹部のオペ模様が映しだされ、これまた熱心にノートしていた。マイコン利用については C A I (Computer Assisted Instruction) として、またコンピューター学習、ワープロ、データベース利用に、そして Library Information System (L I S) の利用にもあてられ、無料で学生向けに用意された Minimedline を含め、幾つかの教材・資料が利用できる。ここの設備等は図書館の L R C としては極めて平均的なものであろう。Washington 大学そして U C L A の Biomedical Library のそれはもう少し規模が小さいものであった。それに比べ Michigan 大学のは図書館棟にあるが、機構・管理上・図書館とは別組織にして運営されている。3 階にはモニターテレビ、ビデオカセット、スライドなどを組み合わせた 2 人掛けキャレルが 192 席とその他機材が設置されている Media 提供部門とマイコン 40 台ほどがセットされた Instruction Computing 部門 (I C) がある。約 3,000 以上もの利用教材の所蔵リストは勿論、その利用にあたっていくつかの方法、さらには施設の使い方等に関するすべての案内のためのソフトが揃っている。訪ねた際も丁度、I C での学習の最中に出くわした。モニターテレビ、ビデオカセット、スライド、マイクロフィッシュ等を備えた 8~15 人用の小学習室が 10 室、30 台ほど並んだ顕微鏡学習室、臨床実習室とでも言うのか診察台や医療器具をセットし本物のように擬した診察室では、コンピュータ・シュミレーション (診療技術訓練の授業・実習) 設備が設けられていた。2 階には特殊技術室が配置されている。これが L R C なのかと言いたい程の諸設備をもち、非常に幅広い業務内容のものであった。特にビデオブース設備と C A I 部門設備の数量的な点と、その実地教育における館員のアシストについて、やはり他の大学とは形態・運営方法にかなりの差がみられるようである。

シンシナチ大学の医学図書館は M C I C の 1 部門であるという。M C I C について極く簡単に説明すると、1984 年に医学図書館、生物医学コミュニケーション、メディカル・センターの広報部門など 5 部門を統合し、現在は 8 部門から成っている組織である。ここでは図書館の 3 階に Media Resources Center がおかれていた。設備等については Washington 大学や U C L A と同じようなものであったが、規模においては上回るものがあった。ここで注目すべきは、様々な教育支援サービス機能が他の 7 部門にあることであろう。Interactive vidiodisc や C A I 等コンピュータ利用の教材・プログラムの開発の Computer Services、ビデオプログラム・教育デザインの製作などの Educational TV Services、コンピュータ・グラ

フィック、スライド、フォトグラフィ、メディカル・イラストなどを作成する Graphic & Publication Services, 試験問題まで印刷する複写・印刷部門の Medical Center Support Services、心音シュミレーション装置を使つての演習のための Educational Development などなど。図書館などの Information 関係、教材編集・学会発表論文助成・ライティング・Audiovisual Programs の開発・教材を含む Instructional Media の研究・開発・提供等の Communicatioins 関係。そして将来展望をにらんだ部門など素晴らしい施設であった。Michigan 大学では LRC 内で、Washington 大学では Health Sciences Center for Educational Resources(HS CER)で、UCLA、Texas 大学の図書館でもこれらの教育支援サービスが行われている。それらの呼称が LRC でなく、TLC、MRC や LRF (Learning Resources Facility) など実に様々で、それぞれの大学の実状に見合ったかたちで管理・運営されている。図書館組織として館内にあるもの、別組織として図書館棟にあるもの、隣接する建物に設けられているものなどいろいろな形態がみられる。LRC が単にニューメディアとよばれる装置・設備の置場所ではなく、Cincinnati 大学などにみた Medical Communications(bio-medical)のような教育支援サービスを取込んだ形、つまり医学教育カリキュラム・学習プログラムの関わりと言うか、総合的に研究・教育をサポートするシステムとして位置づけられた存在である。

ともあれ、今日、米国大学の医学図書館においては、建替えを必要としている図書館はほとんど存在しないという。1966年から75年にかけて86もの医学図書館が新築あるいは増築された背景に、60年代初期のアメリカの大学図書館における「生物医学図書館の危機」なるものへの対処として、医科大学図書館ガイドライン(Guidelines for Medical Libraries)や医学図書館援助法(Medical Library Assistant Act)の導入があったと聞く。われわれが急増する学術情報・多様化した情報要求に直面し、その対応に大急ぎで駆けている状態が、20何年前、すでに米国の医学図書館にあったのだ。医学の物凄い進歩の中で、アメリカの生物医学図書館の発展が他のそれとは格段の違いをみたということである。特に日米の大学図書館比較においては、医学図書館に格差が歴然であるとの指摘を受けた。これは全米を7ブロックに分けた医学図書館ネットワークによる医学情報システムの開発やILLなども含めて図書館のサービス内容が著しく変化したことも一因でしょう。私達が想像していたより、LRC そのものを含めて総合的な教育支援システムとしての位置づけが進んでいたことに驚かされた。とは言え、すべてアメリカのそれに倣うこともないでしょうし、生命科学図書館建設にむけて解決すべき問題も多いが、是非、実地にみて痛感させられたことを生かしたいと思っている。

最後に米国医学図書館視察団に参加させていただいき、また出張に際し、なにかとお力添えいただきました館長はじめ分館長、運営委員の先生方、事務部長、同僚、館員、そのほか多くの皆様がたに心からお礼申し上げます。

(ふくとめ たけし 医学情報課長)

研究室等の端末からの検索サービスについて

前号でサービス開始についてご紹介しましたこのシステムは、研究者及び図書室等の職員が研究室等にある端末を使って直接図書館に接続し図書雑誌を検索するシステムです。すなわち、端末のあるところならどこからでも図書などの所在を調べることができます。

図書館のカウンターでの端末による図書雑誌の検索システム（OPAC）の館外版とお考えください。相違点は、構内・公衆回線による接続であることと、端末側の機種を問わないためにラインモードとなっていることです。

ハッカー等の不法侵入者対策のため利用者管理を採用させていただきますので、図書館に対し利用申請をしていただきます。それによりIDを交付しますので、パスワードとともに利用者で管理してください。IDが盗まれたときの唯一のガードのためパスワードはできるだけ頻繁に変更してください。利用申請書の請求や、パスワードの変更の方法などについては本館学術情報掛（豊中地区2330）にお問い合わせください。

利用許可と同時にマニュアルを利用者にお渡ししますが、ここでは簡単に概要をお知らせします。このシステムは、お手持ちのパソコン等に音響カプラーやモデムと通信ソフトが必要です。利用に関する料金は徴収しません。初期投資は必要ですが、ランニングコストは公衆回線使用時の電話代くらいです。実験等のために機器が揃っている場合は、もっと安価に利用できます。

電話をかけて送信キーを押した後、コネクトコマンドを送るだけで接続が完了です。接続したら、IDとパスワードを送信します。システムはこれを確認します。もしまちがっていたら即刻断線しますので、再度やり直してください。

検索システムを起動するコマンドを投入しますと、メニューが表示されますので番号で選んでください。そののち、検索コマンドを使って検索します。

図書の検索には簡易検索と高度なテクニックの検索と二種類あります。簡易検索では「書名中の語の読み」で検索する方法と、「著者名」で検索する方法の二種類があります。この二つを意識することなく検索するコマンドもあります。高度なテクニックの検索では、書名著者名にくわえて刊行年やISSN、ISBN、JPN-NO、書誌コードなどでの検索が可能ですし、比較値と異なるものといった比較演算子の使用が可能です。件数が増えて困るときに有効です。

検索結果を表示するコマンドも幾種類か用意してあります。これは表示する形式により使い分けます。書誌の簡略表示と詳細表示と所蔵の表示です。その他、ヒストリーを見たり、キーワード一覧を見たりするコマンドも用意しました。

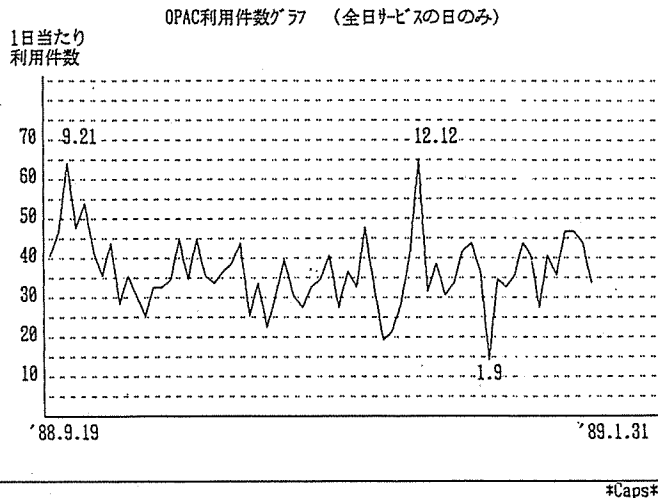
最後をお願いを一つ。このシステムには回線数が余りありません。一人の人が長い間占有すると他の人に迷惑が掛かります。手短かに検索を終え、確実に終了してください。

利用者オンライン目録検索（OPAC）の利用状況

昨年9月から公開しています利用者オンライン目録検索の利用統計がとれましたので、ご報告いたします。1月末日までに107日サービスし、合計2,732回利用されました。木曜日と土曜日は半日のサービスですので、これを除いた全日サービスのみので平均で約3.40回／1日の利用です。

つぎに一日当りの利用件数のグラフを載せました。これは全日サービスした日の件数（DBコネクト回数）を折線で表したものです。同じ人がなんども検索をくりかえすと複数の回数となります。多いときで64回の利用をみました。

画面モードをリリースした12月12日以降の図書の検索では、ほとんど画面モードでの検索が利用されています。このように今後も改良を加えていきたいと思います。



◇◇◇ OPAC検索のための一口メモ ◇◇◇ No.1

◎ 外国人を著者名で検索する場合は原綴で。

シェークスピアを検索するときは、“シェークスピア”ではなく
“Shakespeare”を入れてください。

ただし、書名中に現れた“シェークスピア”という語は
そのままカタカナで検索できます。

“シェークスピアの文学”という題名の図書は、

“シェークスピア”で検索してください。

国立大学図書館協議会シンポジウムに参加して

伊藤 彰

昨年11月17・18日の二日間、第2回国立大学図書館協議会シンポジウムが関西地区大学セミナーハウスで開催された。このシンポジウムは、「学術情報センター目録システムの変更及び学術情報システム特別委員会の報告を基に、今後の大学図書館の目録業務及びシステム化の在り方を討議する」(第2回実施要項)ことを目的としており、前回同様会場を東と西の2地区に分けて行われた。電算機を導入あるいは導入予定の図書館から参加があり、西会場は35名であった。上記の「目録システムの変更」とは、学術情報センターの目録システムのうち、総合目録データベース上の書誌レコードを2階層化したことと、著者名と統一書名の典拠リンク作業を任意化(強制を解除)したことをさす。また、特別委員会の報告とは、国大図協の学術情報システム特別委員会ネットワーク専門委員会の第2次報告「目録情報ネットワークの展開と大学図書館のシステム」(昭和63年6月)のことで、前年の第1次報告「大学図書館のシステム化-図書館ネットワークの構築のために-」に引き続き、学術情報センター目録システム運用上の問題解決と(特に中小規模館の)ローカルシステム構築の問題を報告している。

今回は、「学術情報システムに対応した最適のローカル(各大学図書館)システムは何か」というメインテーマのもとに討議が行われた。また、第一日目の夜には懇親会もあり、情報交換と親睦を深めた。

討議に先立ち、名古屋大学附属図書館の牧村課長補佐より第2次報告についての解説があった。学術情報センターへの登録件数が100万件を越え、分担目録作業による総合目録データベース運用のスケールメリットも出てきたが、その反面重複書誌も増加している。また、端末数の不足などから受入図書的全件登録が達成されていない。オンライン閲覧目録(OPAC)の充実についても、利用者用の端末数が少ない。ローカル側のファイルは簡略書誌とし、索引語の数を減らすなどしてシステムの負荷を軽くする、また、プログラムパッケージを採用し各大学が連絡調整を図ってシステム化する必要がある。以上のような指摘と提言があった。

討議は、4つのサブテーマ、すなわち、①学術情報センター目録システム・ソフトウェア(UIP)、②学術情報センター目録情報とローカルシステム目録情報、③OPACの性能、④ハウスキーピングの各主題ごとに参加者からの事例報告を中心に進められた。参加館は、大規模館から未接続の中小規模館まで、採用機種も各メーカーの大型コンピュータ(図書館専用、学内共用)からオフィスコンピュータまでと多彩で、各館の実状報告を聞くだけでも勉強になった。目録専用端末(あるいはUIP)ひとつとってみても、その機能や操作法にはずいぶん違いがあり驚いた(日電の目録端末はかなりよくできているという印象を受けた)。ローカル側への目録情報の取り込みやOPACの形成、さらに、いわゆるハウスキーピングなどは、各大学の実状や開発の経緯を反映して各館様々であった。特に、既に開発を一通り終えた大規模館での、OPACを中心とするシステム改善やメンテナンスにそれぞれ問題点があるようであった。

わが大阪大学においても、目録端末を増設し全学的規模でのオンライン入力体制を整備拡充することが緊急の課題であり、限られた予算(資源)と少ない人員の範囲内で如何に最適

のシステムと業務体制を維持するかが問題となっている。そのような問題点を再認識する上でも、今回のシンポジウム参加は有益な経験であった。

(いとう あきら 情報管理課学術情報掛長)

教官著作寄贈図書

—吹田分館—

荒田 吉明 (溶接研・名誉教授) 高温工学 荒田 吉明 著 (日刊工業新聞社・昭和63)	第2版 尾崎 弘、谷口 慶治 著 (共立出版・昭和63)
尾崎 弘 (工・名誉教授) 画像処理 —その基礎から応用まで—	久保 忠雄 (工・名誉教授) 応用数学の基礎 第6版 P.I.Romanovskii 著 (共立出版・昭和63)

日程

1.1.12	近畿地区医学図書館協議会例会 (第46回)	(滋賀医大)
1.1.26~27	国立大学附属図書館部長会議	(鹿児島大)

人事

大阪大学薬学部分館長交替

任期満了	岩田 宙造 (薬学部 教授)	63.12.19
就 任	西原 力 (")	63.12.20~平成2.12.19

異動前の所属・職名	氏 名	異 動 内 容	発令年月日
医学情報課受入掛事務補佐員	小山アンナ	(辞 職)	63. 12. 20
	深本 悦子	(採 用) 医学情報課目録掛事務補佐員	64. 1. 1

大阪大学図書館報 Vol.22. No.5 & 6. 通巻95号 平成元年2月1日発行 発行所 大阪大学附属図書館 〒560 豊中市待兼山1の1 ☎ 06(844)1151 内線2355
--